

平成21年度教員評価結果【総合分析】

1. 提出状況 全学

教員数A	提出者数B	未提出者数C(D)	実提出率	(前回:19年度)
345名	329名	16名	96.5%	98.9%
		(長期出張者等)(D) 4名	$B \div (A - (D))$	対前回△2.4%

小数点第2位四捨五入

【分析結果】

実提出率は、96.5%であり、前回実施時(19年度:98.9%)より2.4ポイント下回っている。提出率向上のため教員基礎情報データベースを常時入力可能とする措置を行ったところであり、これを十分周知するなど、今後とも提出率向上に努める必要がある。

2. 領域別評価状況

評価	教育領域	研究領域	組織運営領域	社会貢献領域	全領域
A	15.8%	17.4%	13.9%	16.6%	15.9%
B+	49.8%	38.4%	38.0%	33.9%	40.0%
B	32.5%	31.2%	43.8%	39.9%	36.9%
B-	1.2%	11.4%	2.2%	3.9%	4.7%
C	0.0%	0.8%	0.0%	1.0%	0.5%
評価無	0.8%	0.8%	2.1%	4.8%	2.1%

小数点第2位四捨五入

表示記号と評価

A=特に優れている	B+=普通(プラス) 工学研究科=普通だが やや優れている	B=普通	B-=普通(マイナス) 工学研究科=普通だが やや改善の余地がある	C=改善の余地がある
-----------	-------------------------------------	------	---	------------

【分析結果】

別紙のとおり

3. 再評価の申請状況(件数)

0件

【分析結果】

再評価の申請はなかった。

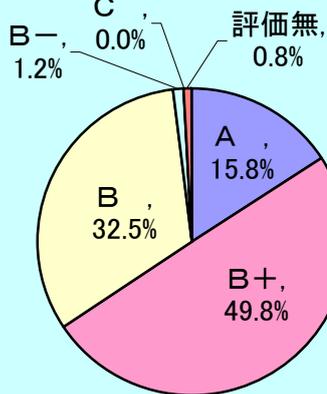
4. 総合分析

【分析結果】

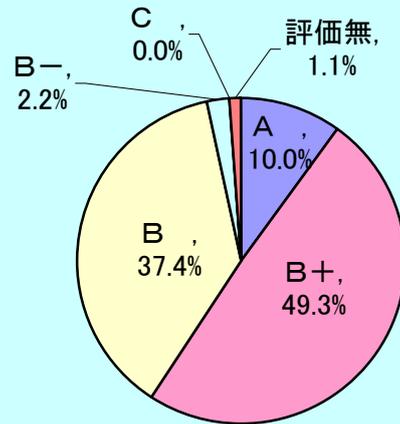
教育・研究・組織運営・社会貢献の4領域すべてにおいて、前回実施時(平成19年)よりも「A及びB+」の上位評価ポイントが上回ったことは、全領域において、評価されるべき顕著な業績・功績があったとの教員の認識を示すものである。研究領域においては、工学部(工学研究科)・農学部で上位評価ポイントが高く、学部間格差は最大18%あり、それはA評価の差による。この学部間の差異が学術分野の性格に基づくものであるとすれば、縮減する見込みは少なく、達成度評価など評価方法の見直しが必要であろう。また、組織運営においても学部間に最大27%の差異があり、それはB評価の差による。つまり、委員会・委員数は学部の教員数に比例している訳ではなく、教員数が少ない学部ほど、組織運営に係る教員の負担が大きいという結果を示すものである。学部間の差異をどう解釈するか、評価方法も含め、今後検討の余地がある。

【教育領域】

21
年度
評価
結果



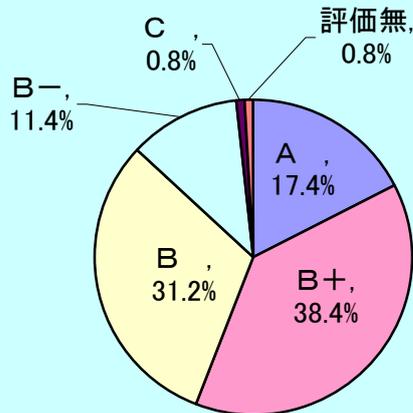
19
年度
評価
結果



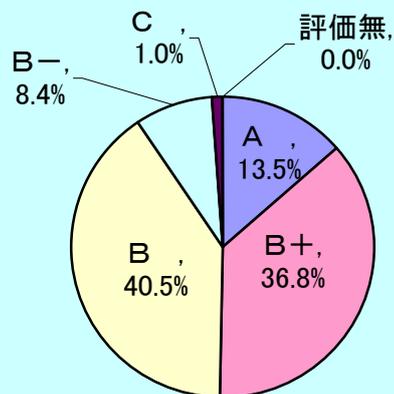
上位評価のA及びB+の合計は65.6%であり、前回実施時の59.3%に対して6.3%アップしており、教育活動が活発な状況が伺える。特にA評価が1.5倍にアップしており、学生による授業評価や教員相互の授業参観などの授業改善の取組がその要因としてあげられる。ただし一方で、上位評価が微増またはほぼ横ばいに止まっている学部もあり、学部間に差があることから、今後とも不断の改善努力が必要であると考えられる。

【研究領域】

21
年度
評価
結果



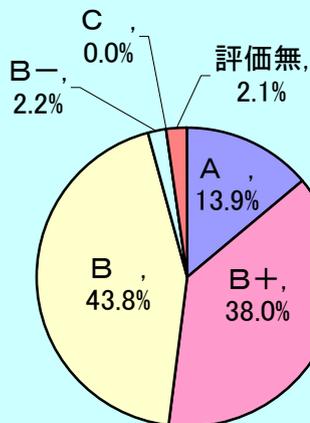
19
年度
評価
結果



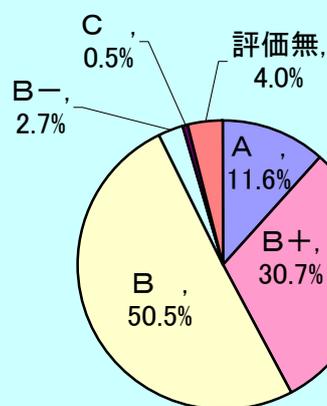
上位評価のA及びB+の合計は、55.8%であり、前回(50.3%)比で、5.5%アップしており、研究活動についても活発な状況が伺える。また、学部別の傾向では、工学部(工学研究科)・農学部の上位評価が高く、60%を超えており、上位評価が最も高い学部と最も低い学部とのポイント差は18%で、この差は特にA評価において顕著である。

【組織運営領域】

21
年度
評価
結果



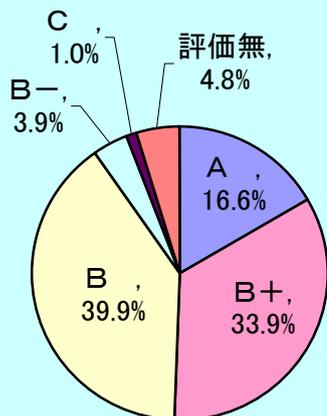
19
年度
評価
結果



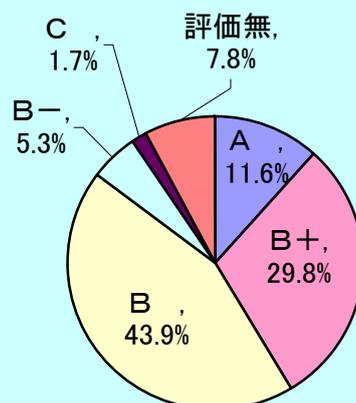
組織運営領域についても、前回に比べ上位評価がアップし、全体の50%を超えた。ただし、学部間によって大きな開きがあり、上位評価が最も高い学部と最も低い学部のポイント差は、27%で、この差はB評価において顕著である。この領域は、職階による評価の差が大きく、学部によっては多くの委員会活動等を強いられる教員がいることが指摘されている。また、委員会への委員選任数は、学部の教員数に比例していないことから、教員数の少ない学部においては、より多くの委員会活動等を行うこととなり、負担となっている。これらの状況から、運営に関する業務が多忙化の原因とも考えられる。

【社会貢献領域】

21
年度
評価
結果



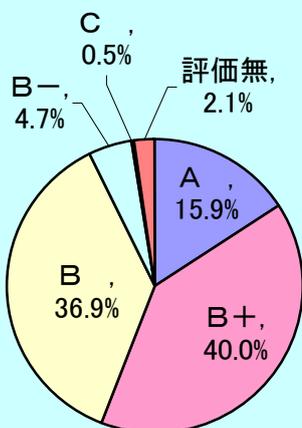
19
年度
評価
結果



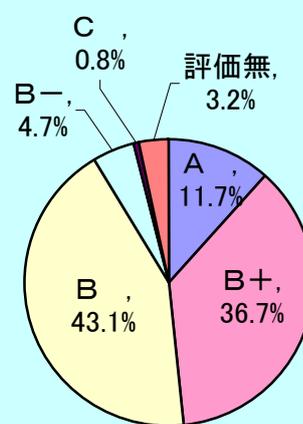
ここでも、前回に比べ上位評価がアップし、全体の50%を超える結果となっている。多くの教員が社会貢献活動に携わっているが、学部によっては、専門分野が多様であり、社会貢献に馴染まない分野もあることから、評価無が多くなる傾向にある。しかし、前回に比べ評価無のポイントは減少しており、社会貢献が日常的な活動であるとの認識が浸透してきているものと考えられる。

【全領域】

21
年度
評価
結果



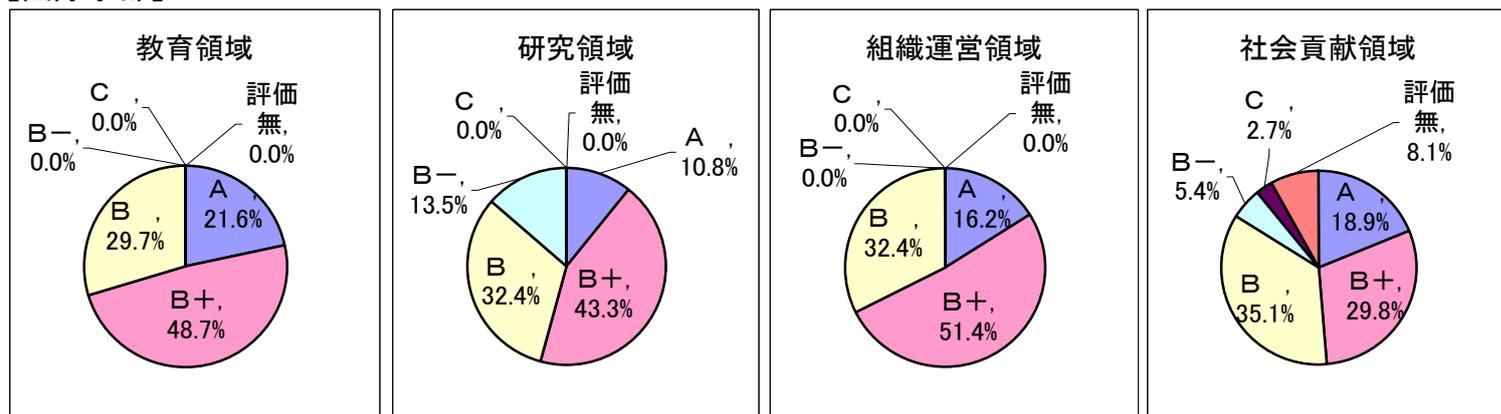
19
年度
評価
結果



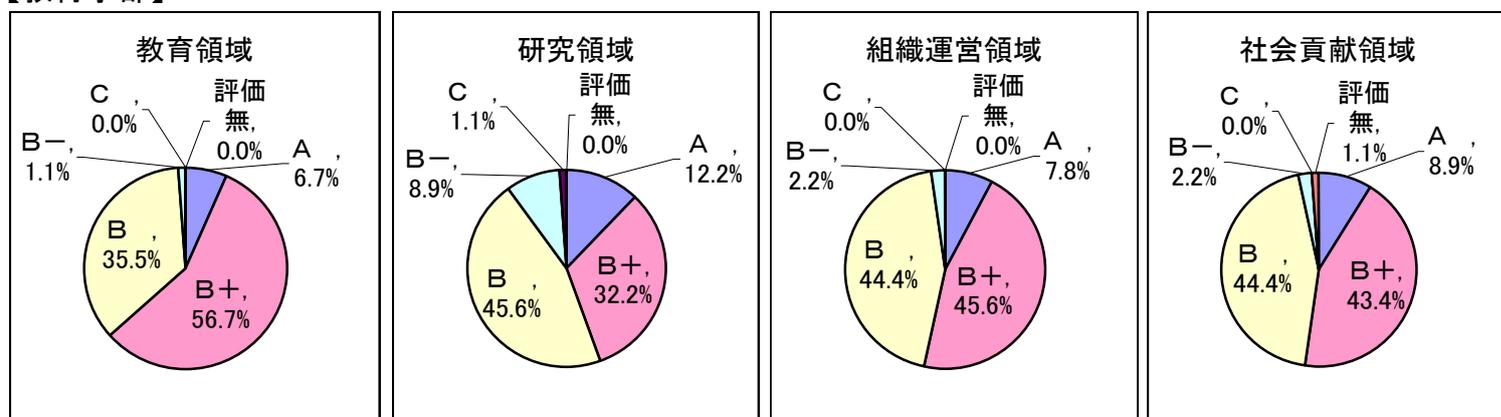
全ての領域において、A及びB+の上位評価が前回を上回り、全領域平均で55.9%、前回より7.5%アップしている。また、併せて評価無、C評価が減少しており、全体的レベルアップが図られている。

各学部等領域別評価結果

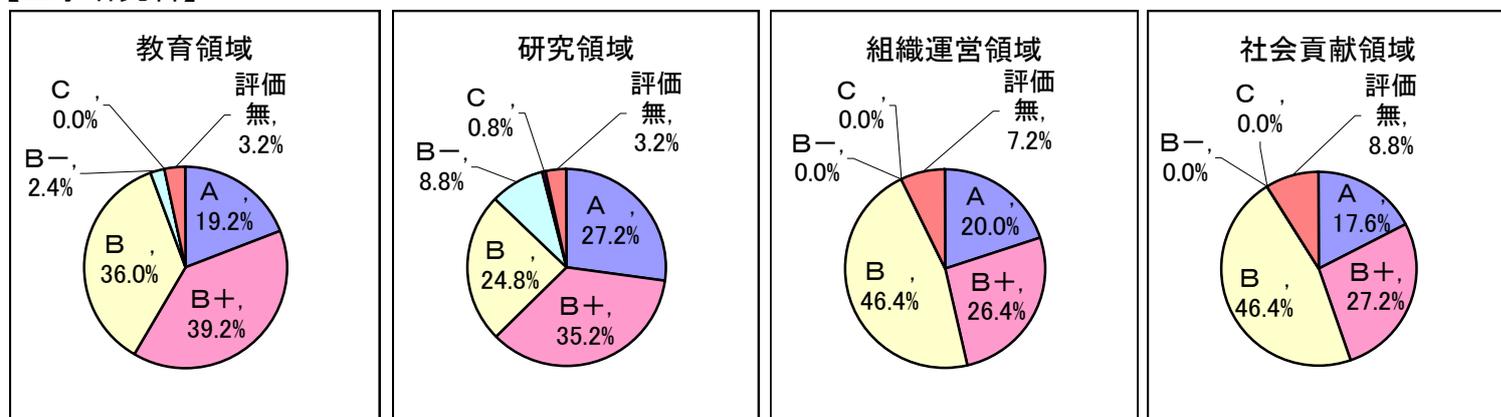
【国際学部】



【教育学部】



【工学研究科】



【農学部】

